
妖怪 お気に入りはずし

山口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪 お気に入りはずし

【Nコード】

N9831X

【作者名】

山口

【あらすじ】

このサイトには妖怪がいる。奴は今日も、お気に入り登録したり解除したりして作者の反応を楽しむのだ。

妖怪キター！

俺は山田太郎、高校生。

最近「小説家の野郎」というサイトで自作の小説を発表している。ここには「お気に入り機能」という便利な物がある。小説をお気に入り登録すると自分のリストに追加され、ワンクリックでそのページに移動する事ができるのだ。

少し補足しておこう。読者に自分の小説をお気に入り登録されると、自動的に2ポイント入る。解除されると2ポイント減る。

人気がある作者はドカドカとポイントをもらえるが、俺はいつまでたってもゼロのままだ。

もう十万字以上書いてるのに、本当にふざけてる。タイトルもキャラクターもストーリーも完璧なのに、どこが悪いのかさっぱりわからない。

ちなみにタイトルは「俺、最高」。キャラは自分がモデル。

ストーリーは、主人公がバカップルたちにケーキをぶつけまくるという痛快な物だ。

これをどっかの新人賞に応募したら受賞確定だろう。選考委員の目がふしあなじゃなければね。

なのに、このサイトの連中ときたら一人もお気に入り登録してくれない。俺の作品が高尚すぎて理解できないのか？

「うがああー、お気に入りしてくれ！ お気に入り登録しやがれえええ！」

自分の部屋でパソコンの画面を見ながら何度もリロードしていると、表示が変化した。

「お気に入り登録1件 総合評価2ポイント」

うおお、来たあああ！

ガッツポーズをしてから跳びはねまくった。遂に来たよ。俺の力作をお気に入り登録する奴が現れた！

「ひゃっほー！」

それにしても、誰が登録してくれたんだろう。さっぱりわからない。

まあいいや。それより、新着の小説でも見てみるか。

ほら、お気に入りゼロの作品が並んでるぜ。こいつらは俺より下なんだ。頭が高い、立場をわきまえよ。あっはっはっは！

ん、とんでもない奴がいる。

お気に入り登録12310件、総合評価24620。ば、化け物か！

タイトルは「異世界で花嫁になりました」だと。こんなのが評価されて俺は2ポイントとか、何かの間違いと思えない。

えーと、作者名は「妖怪・お気に入りはずし」。

なんだ今の。もう一回見てみよう。

「妖怪・お気に入りはずし」

え……え？

まさかコイツ、お気に入り登録したりはずしたりして作者の反応を楽しむ悪党か？

そういう奴がいるっていう話は聞いた事がある。なるほど、コイツだったのか。

こんなのにお気に入り登録されたら悲惨だ。どんなのが登録されてるのか見てみよう。

「妖怪・お気に入りはずしさんのお気に入り小説『俺、最高』」

絶望シター！

ふ、ふぎゃああー！

よりによつて、俺の小説を登録するとは。こうやってぬか喜びさせて、後でさくつと解除する気だな。

でも、前もって犯人を突き止める事ができたのは不幸中の幸いだつた。これなら、お気に入りはずされたとしても精神的ダメージは少なくて済む。

それにしても、こいつが書いた小説の人気はすごい。「小説家の野郎」に掲載されている約十万の作品の中で、累計ランキング2位だ。

いや、待て。お気に入りはずしなんていう血も涙もない所業をやつてる以上、感想欄は荒れてるに違いない。きっと、被害にあつた作者たちの怨嗟の声で満ちあふれているだろう。

よし、さっそく見てみようじゃないか。

まず、鈴音さんの感想。

「ラファエルかつこすぎ！ こんな彼氏がいたら最高だと思ひます。更新がんばってください！」

ふん、次だ次。姫いちごさんの感想。

「世界観がしっかりと構築されていて、引き込まれます」

あつそ、よかったね。

次、雪つさぎさんの感想。

「壮絶な過去を持ちながら明るく振る舞うラファエルもいいですし、主人公のけなげさにも好感が持てました。今まで読んだネット小説の中で最高傑作だと思います！」

なんだそれ。実は、今まで十作品くらいしか読んでないんじゃないな

いのか？

ちくしょー、賛辞ばっかだ。批判のコメントをくれ！

次、アンコロネットさんの感想。

「私は、この作品が嫌いです」

おお、キタキター！

「なんの変哲もない少女が異世界に転生し貴族に見初められるなんて、話が出来すぎていると思うからです」

そうだそうだ、もつと言ってやれ！

「でも、ラファエルは大好きです」

ん、風向きがおかしいぞ。

「彼がエミリアを守るためにたった一人で戦い、最後に力尽きた時

……私は、涙が止まりませんでした」

なんだこいつ、ツンデレかよ。ふざけんなあー！

感想はダメだ。嫉妬で頭が狂ってしまう。

よし、活動報告を見てみよう。このサイトでは自分専用のページで、読者たちに向けて活動報告をする事ができるのだ。

きつと「今日は、お気に入り10件はありました。気持ちいい」

なんてほざいているに違いない。現場を押さえて文句言ってる。

さあ、お前の本性を見せてみる！

「お気に入りはずしさんの活動報告」

よーし、来い！

「累計アクセスが5800万超えました。ありがとうございます！」
ぎ、ぎゃあああー！

なんてケタ違いなんだ。でも俺の小説だって……見る！

「『俺、最高』の本日のアクセス 3」

う、うぎゃああああー！

感想キター！

本日のアクセス、たったの3。

って、もう午後6時だぞ。日付が変わってから18時間たってるんだよ。

それなのに、たったの3……マジで？

う、うわあああああー！

世の中間違ってる。妖怪の小説がウケて、俺の小説がウケないなんてー！

俺は床に倒れ込み、右へ左へと転げ回った。ちくしょう、ふざけんな。なんで、このサイトの読者たちはこんなに見る目がないんだよおお！

「ふぎやあああ！　いてええええ！」

つ、机に足をぶつけた……これも全部、妖怪お気に入りはずしが悪い！

こうなったら、妖怪退治してやる。あいつの感想欄にきついメッセージを書いて、心をへし折っちゃられる！

……怒りの余り、日本語がおかしくなってきた。もう末期だ。

とりあえず、新発売の飲料「スーパーメガトンアトミックスラッシュボンバートルネード」でも飲んで落ち着こう。

ペットボトルのキャップをはずし、スーパーメガトン以下略を口に流し込んでみる。

「ぶげぶぐはあああつ！」

ま、まずい。しょっぱくて辛い。誰だ、こんなもん作ったアホはまずすぎて鼻から噴き出したじゃねーか！

一体、何が入ってるんだ？

「原材料：食塩、唐辛子、水道水」

こら、消費者なめてんのかー！

こんなひどい目にあっただのも、全部お気に入りはずしのせいだ。

この恨み、晴らさしておくべきか！

さあ、奴の作品の感想欄に書き込んでやるぜ！

「はつきり言って駄作。こんなもん誰だって書ける。俺の小説の方が百倍おもしろい」

メッセージ送信っと。

ふー、やれやれ。これで、奴が涙目になる事間違いないし。俺って超天才！

「はっはっは、ふわーはっはっはっは！」

これで気が晴れた。さあ、夕飯でも食べてこよう。

一時間後。

俺は再びパソコンの電源を入れた。さあ、今日も我が最高傑作を更新しよう。

と思ったら、画面に見慣れない文字が。

「感想をいただきました」

な、何。誰かが俺の作品に感想を書いてくれたのか。

ふ、ふ……まあ、当然と言えば当然だ。史上最高・宇宙最強・スペシャルグレートハイクオリティなこの作品を読んだら、誰だって感想の一つも書きたくなるだろうさ。

絶賛の嵐、カモン！

「たぬ吉さんの感想」

イエス、イエス。カムヒアー！

「つまらないです。以上」

……は？

いや、なんかの間違いだろ。もう一回見てみよう。

「つまらないです。以上」

ケンカ売ってんのか、このド畜生おおおお！

お前なんかなあ、お前なんかなあ。鼻の穴に指突っ込んで、鼻毛を一本ずつ抜いてやるうっう！

返信キター！

まあいい、きつとこいつには見る目がないんだろう。

つか、たぬきち。タヌキが人間様の小説に感想書くんじゃないやねえええ！

お、他にも来てるよ。どれどれ。

「まんまるねこさんの感想」

ふん、また動物かよ。ちゃんと文章読めるのか心配だな。

「適当すぎる世界観、記号以外の何物でもないキャラクター、加えて起伏ゼロのストーリー。これ、小説ですか？」

……はい？

こいつは何を言ってるんだ。

小説サイトに小説として投稿してる文章が、スーパーのチラシにでも見えるのか。大根一本百円とか、俺がどっかに書いたのか？

こら、まんまるねこ。お前は、どこか暖かい所で丸くなってる！
ん、他にも感想が来てるぞ。すごくない？

「照り焼きチキンさんの感想」

つか、怒涛の様に感想が来るのはなんでだ？

累計ランキング2位の小説を酷評したからなのか。それとも、その作者にお気に入り登録されてるからなのか。

まあいいや、内容を見てみよう。

「主人公のハイテンションがウザい」

ぷぷぷぷつ、ぷぴー！

ヤバイ、怒りの余り発狂しそうだ。このチキン野郎、レンジでチンしておいしくいただいてやろうか？

ほ、他にも来てるぞ。どれどれ。

「チラシの裏にでも書いてろ」

ぬおおおお、ふおおおおー！

もしこいつが目の前にいたら、鼻に人差し指と中指を突っ込んで

から往復ビンタしてやるのにいいい！

うーん、腹の虫が収まらない。こうなったら、究極のストレス発散法でスッキリしよう。いくぜ、ティッシュの舞！

まず、箱入りのティッシュを用意致します。次に、中から一枚ずつティッシュを取り出します。

そんでもって、それを所かまわず投げて散らかします！

「はいやああああー！」

ふはは、部屋中をティッシュが乱舞してるぜ。どうだ、参ったか。こんな極悪非道な事ができるのは、世間広しと言えど俺だけだろう！「恐れおののけ、愚民どもがああー！ ふわっははは、はーっはっはっは！」

ティッシュをばらまきまくった後、一枚ずつ拾い集めて重ねた。

ああ、めんどくさい。ストレス溜まる……って、全然ストレス解消になってないじゃん！

くそう、これも全部お気に入りはずしのせいだ。よし、こうなったら文句を……ん、あれっ。なんかメッセージが出てるぞ。

「妖怪・お気に入りはずしさんが感想に返信しました」

へ、返信キター！

あれだけ酷評してやったんだし、さぞかしムツとしてる事だろう。俺だけム力つくのは不公平だしな。ざまあ見る。

さあ、返信を読ませてもらおうかな。

突撃ダー！

さあ、どんな反撃をしてくるのか楽しみだ。たぶんこんな感じかな？

「総合評価2ポイントの小説が、累計ランキング2位の小説よりもしろい？ 馬鹿も休み休み言ってください。どちらが上なのかは、きっちり数字が証明しているじゃないですか！」

そう言われたら、こう返してやるんだ。

「それは、このサイトの読者に見る目がないだけだ。お前も含めてな！」

ざまー見る、この妖怪野郎！

さあ、返信を読んでみようかな。

「初めまして。感想をありがとうございます」

おれなんか、どーだっていい。

「駄作であるとの指摘をいただき、自分の力量不足を痛感しました」
あっそ、それで？

「少しでも読者の方々に楽しんでいただける様、精進していくつもりです。では失礼します」

ぷ、ぷぴー！

なんだこいつ、噛みついてくるかと思ったのに。なんで大人の対応をしゃがるんだー！

「ちくしょー、全然怒ってねえ。骨折り損じゃねーか、むきやー！」

俺は、ティッシュを投げ散らかして暴れた。部屋の中を再び白いティッシュが乱舞する。

「ほんぎゃー、ふぎやぎやぎゃー！ 悔しい、悔しいいー！」

くつつ、さつき拾い集めたばかりなのに……このストレス解消法はもうやめよう。

次に、台所から1・5リットル入りのペットボトルを持ってきた。中身は空だ。

それにマジックで「お気に入りはずし」と書き、机の上に転がす。これで準備は完了だ。

「ふっふっふ、お気に入りはずし……この俺を怒らせた事を、後悔するがいい！」

さあ、処刑タイムがやってまいりました。いくぜ！

「ほあちゃー！」

ペットボトルを目がけて、思い切り右手を振り下ろす。ぶっ潰してやるらるれら！

ところがその時、ペットボトルが床に転がり落ちた。目標を失った俺の手刀が机を直撃する。

「ほぎやぎやぎやー！ い、いてええええー！」

余りの痛さに床を転げ回り、今度は机に足をぶつけてしまう。

「んぎゃあああー！ どしえええええー！」

ち、ちくしょー。これも全部あいつが悪い。お気に入りはずしのバカ野郎！

くっ、もう感想を書くのはやめだ。他の方法で戦うしかない。

それにしても、お気に入りはずしてどんな奴なんだろう。ユーザ情報を見てみよう。

「10歳〜19歳 女性」

なんだ、この大ざっぱな情報は。小学生と大学生の判別すらできねー！

ん、なんかバナーが貼ってあるぞ。その上に説明もある。

「お気に入りはずしさんのブログ」

ふっ、これが妖怪の巣か。さっそく突撃してやる。

俺の怒りを思い知れ！

シビレター！

俺は「妖怪・お気に入りはずし」のブログをクリックした。

さあ、爆撃してやるっちゃ。読んだら心が折れる様な言葉を書き込んでやるっちゃー！

「むははは、むははははは！」

バカ笑いしながら画面を見ると、トップページに写真が映っていた。

白いブラウスに赤いネクタイ、赤いプリーツスカートを着たサイドテールの女の子だ。

妖怪を名乗るくらいだし、きつと不細工だろう。そう思いながら写真を見た途端、俺は鼻血を噴いてしまった。

「ふんによおおおー！」

な、なんてこった。超絶美少女じゃねーか！

ぱっちりした目に小さな鼻、白い肌にチェリーピンクの唇。輪郭は非の打ち所がないほど整っている。あと、制服の上からでもわかるほど胸が大きい。

こんなのが街を歩いていたら、間違いなく男たちは振り向くだろう。

く、くうつ……どうすつぺや。

なんか、文句を言い辛くなってしまった。このブログにネチネチ書き込んで、ストーリーカー扱いされたら嫌だし。

ちよつと待て。これ、本人なのか。実は別人ってオチもあるだろ。そーだ、きつとそうに違いない。この妖怪め、俺をだまくらいしやがって。人間様をなめんな、むぎゃー！

ん、他にも写真がある。さっきの子が何か書いたプラカードを持っているよ。

えーと、書かれてる文章はと。

「妖怪・お気に入りはずしでーす」

ほ、本人ぎゃわわわあー！
畜生、ブログを見るのはやめだ。このままだと惚れてしまう。」
小説家の野郎」へ撤退じゃー！

……うーん。どうしよう。

奴をギャフンと言わせてやりたいのに、こっちがギャフンと言わ
されてしまった。

よし。こうなったら、再び奴の感想欄に突撃だ。今度は読者ごと
巻き込んで、地獄の底へ突き落としてやるぜ！

うししし、うしししし。牛しししシマウマ！

……我ながら、言ってる事が意味不明だ。そろそろ病院に行った
方がいいかもしれない。

さあ、気を取り直していつてみよう。「異世界で花嫁になりました」
を爆撃だ。

しかし、感想数528って怖ろしいな。しかも、その全部に返信
してやがる。敵ながら侮れない。

さて、書く文章はこれだ。

「この駄作が支持されてる理由は、作者がかわいいからだ。支持し
てる連中は女ばかりに見えるけど、実はネカマに違いない」

ちなみにネカマっていうのは、男のくせに女のふりをしてネット
に書き込む連中の事ね。

よーし、送信。ぽちつとな！

これで、読者たちは怒り狂うだろう。ざまー見ろ。将を射んとす
ればまず馬からだ、ぷぎゃー！

炎上シター！

その翌日。

高校から帰宅した俺は、自分の部屋にあるノートパソコンの前に座った。

お気に入りはずしの読者もへこましてやった事だし、気持ちよく小説の続きを執筆しよう。

……と思ったら、見慣れないメッセージが。

「活動報告に書き込みがありました」

へえ、誰かが俺の活動報告にコメントしたらしいな。「応援します。がんばってください！」とかだろう。

書き込んだユーザは雪月花、20歳〜29歳の女性。どうやら、見知らぬお姉さんのハートをわしづかみにしちゃったようだね。

なんて罪な男なんだ、俺は。もほほほほほ！

さあ、コメントを見てみよう。

「『異世界で花嫁になりました』が駄作？ 誰にでも書ける？ ブーメラン発言乙。あなたの小説こそ駄作じゃないですか。小学一年生にでも書けるレベルですよ。あ、もしかして一年生ですか？」

何言ってるんだ、この女は。「乙」ってなんの略なんだよ？

おつ、おつ……おつかれ様。いや、なんか違うな。おつ、おつ……

…おつばい。

おつばいの略か、なるほどねー！

すると、この人が言ってるのは「ブーメラン発言おつばい」か。

たぶん、自分の巨乳をさりげなくアピールしたいんだろう。

いくら俺が好きだからって、誘惑するのはやめてほしい。

お、他にも来てるぞ。どれどれ。

ユーザ名「アジカン大好き」、10〜19歳の女性。アジの缶詰なんてあるのか。サバ缶ならよく見るけど。

えーと、コメントはと。

「私たちがネカマって、何を根拠に言ってるんですか？ 変な言い
がかりはやめてください。迷惑です！」

くくつ、ネカマが釣れた。ムキになって怒ってるのが、何よりの
証拠だああー！

おお、他にも来てるよ。すげーな俺、大人気じゃんか。

ユーザ名「BL同好会」、10〜19歳の女性。はあ、今度は腐
女子っすか。

さてさて、コメントはと。

「中二病をこじらせた様な主人公もひどいですけど、作者はもつと
ひどいですね」

う、うるしゃああーい！

ムキー、ム力つくうう。こんなイケメンをつかまえて、何がひど
いって抜かしやがるんだああー！

……あ、なるほど。人気を独り占めしてる事がか。そりゃ悪い事
をした。他のユーザが見たら嫉妬するよね。

他にも十件以上コメントが来てるけど、めんどくさいから読むの
やめよう。俺も忙しいんだ。

まあ無反応つても悪いし、コメントしておこう。セクシーお姉
さんには個別に返信したいとこだけど……仕方ない、「あなたを意
識してますよ」っていうアピールだけはしておくか。

ハズサレター！

さあ、はりきって返信してみよう。

「みんな、おっぱいコメントありがと！……じゃなくて、いつばいコメントありがと。こんなに多くの読者の方々に応援していただき、感無量です。これからもがんばりまくっちゃうよ！」

よし、送信つと。我ながら完璧だ。

さて、自分の小説のアクセスでも見るか。

うつ……すげえ。今日だけで691人。いよいよ俺も人気作家の仲間入りか、ひゃーはっはっはっ白菜！

……まずい、また妙な事を。なんで白菜が出てくるんだよ。俺は白菜よりキャベツの方が好きなんだ！

つて、んな事はどーでもいい。これだけアクセスがあつたんなら、当然お気に入りも増えてるだろう。まあ200件はかたいよね。

小説情報、カモーン！

「お気に入り登録数 0」

……ん？

「総合ポイント 0」

んんー？

なんだこりゃ、どーいう事だ。

もしかして、これは……1件しかないお気に入りはずされた？「ふんぎゃああああああー！死ぬうつうつウホウホッ！」

俺は自分のベッドにダイブし、頭を抱えながら転げ回った。

わかってたよ。あいつにお気に入りをはずされる事はわかってたんだ。

だから心の準備をしてたのに……それなのに。

1件しかないお気に入りがなくなる事が、こんなに辛いなんてえええエンドウ豆！

うつうつ、涙が……涙が止まらないよ。

お気に入りが3ケタも4ケタもある奴に、絶対この気持ちはわかりっこない。増してや5ケタある奴なんて、蚊にチヨップされたほども感じないだろう。

お前ら、一回体験してみろ。死にたくなるぞ。

「ちくしゃう！ あの妖怪めえええ円高ユーロ安！」

も、もう日本語すら怪しい。なんだよ、ちくしゃうって。

こうなったら、近くのドブ川に飛び込んで死んでやる！

……と、その前に。あいつの感想欄に遺書をプレゼントしてやる。」「あなたにお気に入りをはずされたので死にます」ってな！

ふふふ、ざまあ見やがれ。

あ、そうだ。書き込む前に感想欄を見てみよう。俺の事が話題になってるかもしれないし。

どれどれ……って、おお？

なんか荒れてないか、これ。

今まで熱烈な支持者だった女の子たちが、ものすごい勢いで作者に噛みついてる。一体何をやらかしたんだ、あいつ？

とにかく、じっくり読んでみよう。

「ラファエルを死なせるとか、マジありえないし！ ふざけんな！」

「ハッピーエンドを期待してたのに失望した。もう二度と読まないから」

「お気に入りはずしさんは鬼ですか？ 最低な作者ですね！」

うーん、怖ろしい。

同情シター！

もう、読者が作者を叩くわ叩くわ。感想欄の上から下まで、延々と非難の文章が続く。

すごいな。こんなん喰らったら、さすがの俺でも心が折れるだろう。

「目障りなんで、アカウントごと消してください！」

「こんな駄作が2位とかありえない！ みんな騙されてるよ」

「ラファエルが死んだ第三十二話だけ書き換えてよ。できないなら連載やめて！」

しかも、お気に入り4千件近く減ってるし。マジ半端ネエっす。そうか、わかった。こいつは「妖怪お気に入りはずし」じゃなくて、「妖怪お気に入りはずされ」だったんだな！

ぷひゃーはっはっは、むっひょひょヒョウタン！

感想欄をまた見てみると、お気に入りはずしの返信があった。涙目になりながら書いているのがはつきりわかるくらい、悲惨な文章が書きつらねてある。

「ラファエルを死なせてしまったのは、安易な考えによる物でした。本当に申し訳ございません」

「問題の部分は、本日中に改稿居たします。二度とこの様な過ちはお菓子ませんので、どうかおゆるしてください」

「読者の皆様を深いな気分になさってしまった事を、心よりお詫び申し上げます」

ぷぷっ、誤字がひどい。「居たします」「お菓子ません」「深い」だつてさ。

たぶん、目に涙が溢れてまともに画面が見えてないんだろう。いやー、かわいそうだね。

そつだ、活動報告も見てみよう。タイトルは「改稿します」だそつだ。

ここでも彼女が誤字だらけの文章で必死に謝罪してるけど、読者たちが容赦なく叩いている。

「さっさとやってよ、バカ！」

「書き直すの遅いね、ゴミ作者は」

「みつともない謝罪文書いてる暇あったら、本文直してほしーんですけど！」

ちょ……余りにもひどすぎないか。ほとんどイジメだろ、これ。

泣きながら改稿している彼女の姿が浮かんできて、なんだか胸が締めつけられる。

文面から察するに、ラファエルは主人公の恋人なんだろう。前回読んだ感想と合わせて考えてみると、彼は主人公をかばって死んだんだと思う。

二十歳以上の読者たちはその展開を受け入れたけど、十代の読者たちは受け入れられなかったらしい。叩いているのは、ほとんどが十代の女性だし。

確かに、主人公の恋人がいきなり死んでしまうのは地雷展開もいい所だ。彼女たちが怒り狂う気持ちもわからなくはない。

でも、ちょっと待ってくれ。

キャラの運命を決めるのは、あくまでも作者だ。読者がギャーギャー騒いでそれを変えさせるっていうのは、間違ってるんじゃないか？

書キコンダー！

そこで俺は、お気に入りはずしの活動報告に書き込んでみる事にした。

「皆さん、どうか落ち着いて。好きなキャラが死んだ事に対して怒るのはわからなくもないけど、作者が決めたんだから仕方ないでしょう。読者が強引に内容を変えさせるなんて間違ってると思いますせんか？」

書き終えた後、問題の三十二話を読んでみた。死んだはずのラファエルが傷を負いながらも生き延び、主人公と一緒に逃亡している。残念だ。お気に入りはずしは、読者の圧力に屈してしまったらしい。

活動報告に戻ると、もう他のユーザのレスが付いていた。なんつー早さだ。

「あなたのおっしゃる通り、キャラが作者の裁量で死に追いやられる事自体は仕方ないです。私もそれはわかります」

ふんふん、なるほど。

「でも、問題はそこじゃないですよ。お気に入りはずしさんは、読者を裏切った。主人公とラファエルが結ばれてハッピーエンドになつてほしいという、みんなの淡い期待を完全に裏切ったんです」

うーん、そうか。まあ、気持ちはわからなくもないな。

結局、第三十二話が改稿された事によつて騒ぎは収まった。

でも急激に減つたお気に入りに戻る事はなく、読者の感想もどこか冷めている。

ランキングも以前の2位から15位まで転落し、累計10位までしか表示されないトップページから姿を消してしまった。

彼女にとっては、踏んだり蹴つたりだろう。読者には叩かれる、お気に入りには減る、ランキングは転落する。いい事なんて一つもない。

そこで、メッセージを送ってみる事にした。

「みんなに叩かれて悲しいでしょうけど、あまり気を落とさないでください。これからがんばってください」

その後、自分の小説の執筆に取りかかる。今日も力作を投下してやるぜ。お気に入りには0件だけだな！

書き終えてから更新すると、お気に入りはずしからメッセージが来ていた。

「ありがとうございます。救われた気分です。小説を書くのをやめようかと思っていたんですが、少しだけやる気が出ました」

おいおい、人気作家がやめるとか言うなよ。評価が落ちたとは言え、結構な人数に支持されてるんだからさ。

何度かメッセージを交換する内に、一つわかった事がある。どうやらこの子は、自分を責める傾向が強いようだ。

「私が全部いけないんです。読者の期待を完全に裏切ってしまった。『二人には幸せになってほしい』と何度も言われてたのに。

やっぱり私には、小説を書く資格がないのかも……」

慰メター！

俺はそれを読んで、すぐに返信した。

「辛いのはよくわかるよ。でも、くじけないで。今まであれだけの読者を集めてたんだから、君の小説には魅力があるって事だよ。資格がないなんて事はないから」

彼女からもメッセージが返ってくる。

「ありがとうございます……涙が止まりません」

しばらくやり取りした結果、お気に入りはずしは俺と同じ年だという事が判明した。隣の県に住んでいるらしい。たぶん、電車に乗れば一時間くらいで会いに行けるだろう。

やがて、彼女はメアドを送ってきた。「小説家の野郎」を通すのではなく、携帯でやり取りしたいそうだ。

うーん、見ず知らずの人間にアド送って大丈夫だろうか。信用できるかどうかわからないのに。

でも、彼女はフリーメールのアドレスじゃなくて携帯の生アドを送ってきてくれている。会った事もない男性を相手に、そんな事をするのはさぞ不安だったろう。

彼女の勇気に応えたい。そう思った俺は、メールしてみる事にした。

それから一週間後。

俺は、隣の県に向かう電車に乗っていた。お気に入りはずしが「どうしても会いたい」と言って聞かないからだ。

ちなみに、本名は菅原陽菜というらしい。彼女は猫を抱いた写メや、友だちと一緒に映っている写メを送ってくれた。どれもかわいすぎて鼻血が出そうだ。

やがて、彼女が待っている駅に着いた。混雑していた電車から、スーツ姿の男性や女性、学生や高齢者が降りていく。

彼らは、改札口へ上がるエスカレーターにどやどやと乗り込んだ。俺も彼らに続く。ああ、胸の鼓動が止まらない。

改札を出るとロータリーになっており、周囲には大型の量販店が建ち並んでいた。人通りがものすごく多い。なんつー都会に来ちまったんだ、オラはおっかねえだよ。

ちなみに今日は、パーカーにスキニーデニムという素晴らしくラフな恰好だ。ごめんね、こんなんで。

駅の出口で辺りを見回していると、ショートケーキを思わせる物体が視界に入った。

実際は、黒いサイドテールの女の子だ。

着ているのが白いカットソーと赤いミニスカートなもんだから、ついショートケーキを連想してしまった。ピンクの小さなトートバッグも持つてる。

あれだ、間違いない。

ぱっちりした目に小さな鼻、白い肌にチェリーピンクの唇。輪郭は非の打ち所がないほど整っていて、しかも巨乳。

なんつー美少女だ。うちのクラスの女子どもと、同じ生き物とは思えない。

よし、声をかけてみよう。

「あの、菅原さん？」

惚レター！

彼女は満面に笑みを浮かべて言う。

「はい。山田太郎さんですか？」

「う、うん」

「初めまして、菅原陽菜です。よろしくね」

「やわからかそうな白い肌と言い、整った顔立ちと言い……ヤバいです。超絶美少女っす。」

「山田君、どこ行こっか？」

「え？ えーと、腹が減ったから何か食べたい」

「じゃあ、あそこにする？」

陽菜が指さしたのはファーストフード店だった。とりあえずそこでもいいや。

中に入ると、土曜だけあつてほとんど席が埋まっていた。でも、俺たちが座る場所くらいはありそうだ。

彼女をつれてカウンターの前へ並び、何にしようか考える。

「うーん、どうしようかな。イカの塩辛バーガーかなあ」

「え、何それ。又メ又メしてそう」

「じゃあ、らっきよバーガーとか」

「山田君、変わった物が好きだね」

「ヤバイ、変人扱いされてしまう！」

「そそそ、そんな事ないって。俺はノーマルだよ。やっぱりオーソドックスな所で、ハンバーガーにしておこう」

「ふーん、私はどうしようかな」

あ、順番が回ってきた。

エプロンをした茶髪のお姉さんが、にっこりと微笑む。

「いらつしやいませ！ 本日は、メガマッチョバーガー増量サービス中です！」

「えーと、ハンバーガー……」

「メガマツチヨバーガー、増量サービス中です！」

「いやあの、それは高いから……」

「メガマツチヨバーガー、増量サービス中です！」

う、うう。押し切られる。

「メガマツチヨバーガー増量サービス中です！」

「じ、じゃあメガマツチヨバーガーセット一つ……」

「かしこまりましたー！ メガセットワン、プリーズ！」

ちくしゃう！

迫力負けした……なんて奴だ。

店員は、にこにこしながら陽菜に声をかける。

「お連れのお客様はいかがなさいますか？ 本日、メガマツチヨバーガー増量中です！」

「照り焼きチキンバーガーセット」

「メガマツチヨバーガー増量中です！」

「照り焼きチキンバーガーセット」

「メガマツチヨバーガー増量中です！」

「照り焼きチキンバーガーセット」

「メガマツチヨバーガー増量中です！」

「照り焼きチキンバーガーセット」

店員の顔が硬直した。あ、鼻水が出てる。

「メガマツチヨ……」

「照り焼きバーガーセット一つ」

「か、かしこまりました。照り焼きセットワン、プリーズ……」

す、すげえ。押し切りやがった。

俺たちは自分が頼んだセットを持ち、向かい合って席に着いた。横の席には制服姿の女子高生が座り、写メを見せ合いながら騒いでいる。

「ねえ、これ見て！ すごいっしょ！」

騒音ダー！

横に座っている女子高生三人組は、とにかくうるさい。ファストフードに入ると、やたら女子高生に遭遇するのは俺だけだろーか？「きゃはは、何これー！超ウケるんですけど！」

「あつははは、やりすぎー！原形ないし！」

とにかく、きゃーきゃーやかましい。お前らはしゃべってないと死ぬのか？

って、あれっ。あいつらメガマツチヨ食べてない。押し切られて買ったのは俺だけ？

まあいいや、シカトシカト。今は、それどころじゃないし。

それにしても、このハンバーガーはすごい。いつもはハンバーガー四枚重ねなんだけど、今は増量中で六枚重ねだ。

どうやって食べるんだろう？

「うーん……」

悩んでいる俺を見て、陽菜が目をぱちぱちさせながら言う。

「どうしたの？」

「いや、どうやって食べればいいのかと」

「一枚ずつはがすとか」

「それはない！絶対ない！」

ハンバーガーにはそのままかじりつくのが、俺の中のルールだ。曲げる気はない。

うおおおお！

メガマツチヨをしっかりつかみ、目一杯口を開いてかぶりつく。

よし、いける！

そう思った瞬間、六枚のハンバーガーが一斉に飛び出した。ぐあああ、崩壊するんじゃない！

残ったのはパンと野菜だけ。素晴らしくヘルシーなハンバーガーの出来上がりだ。

トレーに落ちたハンバーグを見て呆然としていたら、彼女が必死に笑いをこらえていた。体がふるふる震え、涙目になっている。

「ぷ、ぷぷ……ぷぷっ」

あーあ。何やってんだよ、俺。

隣の女子高生たちは、ここぞとばかりに爆笑している。

「あっはっは、あーっはっはっは！」

「ウケる、超ウケる！」

「きやははは、ダサすぎ！ 彼女の前でかつこ悪！」

お前ら、他人の不幸がそんなに楽しいか。あまり笑つてると、三人ともパイナップルみたいな髪型にすんぞ！

それに、こいつは彼女じゃない。まあ、そうだったらいいなとは思っけど。

ヤバイ、陽菜の顔が真っ赤になってる。今にも噴火しそうだ。

「あの……笑っていいよ。我慢なくていいから」

「う、うん」

「遠慮しないで」

「ご、ごめんね。あははは、あっははははは！」

まあ、楽しんでもらえたならいいか。

そうそう、聞きたい事があつたんだ。

「ねえ、なんで俺に会いたいと思ったの？」

陽菜が微笑みながら言う。

「みんなに叩かれてる状況で、あなただけは私の味方してくれたでしょ。それに慰めてくれた。だから、お礼を言いたいと思って」

そんな物、メールで済ませればいいのに。わざわざ会うほどの事もないと思っけど。

泣力セター！

まあ、別にいいけどね。この子と会えたのはラッキーだし。

そうだ、結構へこんでたみたいだけど大丈夫なのかな？

「あの……散々叩かれてたみたいだけど、今の気分はどう？ まだへこんでる？」

「ううん、大丈夫。山田君が何度もなぐさめてくれたから。本当にありがとう」

「どう致しまして。じゃあ、これからも小説を書いていくんだよね？」

そう言った途端、彼女の顔が硬直した。ヤベっ、余計な事を聞いたかも。

「小説……小説ね……」

「ごめん、今のなし。無理に答えなくていいよ」

「う、う……」

陽菜の瞳が涙で潤んでくる。なんてこった、全然大丈夫じゃねーよ！

「ふ、ふえ……ふえええーん！」

泣き声を聞いて、今までうるさかった隣の三人組が黙り込む。うお、連中の視線が俺たちに集まってる！

しかも、顔を寄せ合いながらなんか言ってるよ。

「……別れ話？」

「そうじゃない？ 女の子が泣いてるし」

「嘘、あんなかわいい子を振っちゃうんだ。何様？」

「ありえないよね。自分を超イケメンとも思ってるんじゃない？」

「うわー、ないわ」

ち、違う。おまいらの考えは一から十まで間違ってる！

俺は、あわてて陽菜に声をかけた。

「泣かないで。悲しいのはわかるけど……」

「うえええええーん！」

ヤ、ヤバい。他の客まで注目しだした。冷たい視線をひしひしと感じる。

「陽菜ちゃん、落ち着いて。これからもがんばって書いていけば、きつとまた人気が……」

「ふああん、ああーん！」

まいったね、こりゃ。一向に泣き止む気配がないよ。

仕方がないので、彼女の隣に行って髪を撫でながら言った。

「陽菜ちゃん、そんなに悲しまないで。君は才能あるし、がんばれば読者は戻ってくるから」

「ふ、ふえっ……」

「俺を見てみなよ。お気に入りが入りかただって、こんなに堂々としてるんだぜ。君が嘆く事なんかないって」

彼女がようやく泣き止み、ハンカチで目を拭きながら口を開く。

「ありがとう、山田君。本当に優しいんだね」

「いえいえ」

「私、小説家になりたいって夢があるの。でも、今回の失敗でそれが閉ざされた様な気がして」

「え、なんで？ たまたまあのサイトの読者にウケなかっただけでしょ」

「私は、そう思わないんだよ」

うーん、そこまで深刻になる必要があるのかな？

首を傾げていると、彼女は俺をまっすぐに見つめて話し出した。

「山田君の理想の小説って、どんな物？」

理想ねえ、そうだなあ。

「主人公がとにかく強くて、なみいる敵を薙ぎ倒していく奴かな」

陽菜の夢

「男の子って、そういうの好きだよね」

「うん、まあ」

そりゃそうだ。強い奴は周りの男から尊敬されるし、何よりかっこいい。

「私の理想はね」

「うんうん」

「読んだ人の心に残る小説」

心に残るか、なるほど。

「私が一番好きな小説のセリフに、こんなのがあってね」
「うん」

「永遠に、あなたを愛してる」

割と、どこにでもありそうな言葉だな。

「陳腐だと思う？」

「いや。でも、よく聞くと言うか……」

「だよ。私もそう思う。使い古されたなんの変哲もない言葉が、どうしてここまで心に残るんだろうと思ったよ」

「うーん、なんでだろう」

「このセリフはね。不治の病であの世へ旅立とうとしているヒロインが、ずっと自分を支えてくれた主人公に対して言った物なんだよ」
なるほどね。

「私の体は、これから消滅しまう。でもその心は、いつまでもあなたと共にある……そんな意味が込められてるの」

そうか、深いな。つか、ずっしり重い言葉だ。

「私はその小説を読み終えた時、涙が止まらなかった。一生分の涙を使い果たしたんじゃないかってくらい泣いたよ。同時に思った。こんな小説を書ける人間になりたいって」

陽菜がラファエルを死なせた理由がわかった様な気がする。彼女

は、読者を泣かせる物を作りたかったんだ。

それが逆に、自分が泣かされる結果になってしまったのは皮肉と言っしかない。

俺は、陽菜のサイドテールを再び撫でた。彼女も心を開いてくれた事だし、こうなったら本音を言おう。

「君の方向性は間違ってない。ただ、手段がまずかった」「手段？」

「うん。読者を泣かせるのはいいけど、他にも方法はあっただろ。

人気キャラをいきなり死なせたら、読者は絶望しちゃうじゃないか」「え。でも、それが一番の早道かと……」

「ダメだよ。作者としての目だけじゃなくて、読者としての目も持たないと」

陽菜はぱっちりした目を大きく開き、俺を見つめた。その表情が晴れ晴れとした物に変わっていく。

「そっか……そうだね。なんかおかしいなーと思ってたんだよ」

「メインキャラを助けるために、サブキャラが命を落とすってのはまだいいよ。でも、メインキャラをいきなりはないでしょ」

「そうだね、言われてみればその通りだよ。私が読者だったとしても、たぶん怒ると思う」

俺は強くうなずく。

「書き上げた後に『これは自分の作品だ』という意識を捨てて、他人が書いた物だと思いながら読むといいよ。そうすると、まずい部分を冷静に分析できるから」

ブーメラン乙

読者としての視点を持つ……か。

言っておいてなんだけど、自分が一番できてない。

心の中に、巨乳のお姉さんが出てきて口を開く。以前、俺にいやもんをつけてきた雪月花だ。

「ブーメラン発言乙。低レベルな小説を書いてるあなたが『読者の視点を持って』ですって？ 人に言う前に自分が意識しなよ、この駄作者！」

うるせーな、この巨乳。俺は一回投稿した後、必ず読者の視点を想定しながら読み直してるよ。

それでもお気に入り0なんだから、仕方ないだろーが。ウガー！ん、あれっ。陽菜がキラキラした目で俺を見てる。

「山田君……ありがとう。目から鱗だったよ」

「え、そう？」

「今度から、『読者として』自分の小説を読み直してみるね」

「う、うん」

お気に入り0の底辺作家の俺が、累計2位だった奴に何を教えるんだろっ。普通は逆だよな。

「山田君。気晴らしに、どこか遊びに行こうよ」

「え、この辺って遊べる様な所ある？」

「んーとね。ゲームセンター、カラオケ、ボーリングかな」

「ゲーセンには何があるの？」

「UFOキャッチャーとかプリクラとか」

うおう、ダメだ。前にUFOキャッチャーに三千円つぎ込んで、何も取れなかった苦い記憶がある。プリクラは興味ないし。

かと言って、カラオケもNGだ。聴いた人が爆笑するほどの音痴だからね。

じゃあボーリング……って、やった事ないなあ。でも、他に選択

の余地がない。

「ボーリングにしようか。やった事ある？」

「んーん。でも、おもしろそう」

「んじゃ、行ってみよっか」

「うん！」

俺たちは量販店の五階にあるボーリング場に入った。二十個のレーンがあり、球がピンを倒すコーン、コーンという音が響いている。あと、かかっている音楽がやたらうるさい。

俺たちは一番左端で壁際にある、二十レーンを使う事になった。十九レーンは、茶髪の高校生カップルが使っている。男は黒いＴシャツに茶色のハーフパンツ、女は紫のキャミソールワンピース姿だ。男が豪快に赤いボールをブン投げ、ピンが四方八方にぶっ飛ばされた。その直後、ピンが置かれていた上の部分に「ストライク」の文字がでかでかと表示される。

「っしやー！」

彼はガッツポーズをし、彼女が笑みを浮かべながら手を叩く。君たち楽しそうだね、死んでいいよ。

他人の幸福ほど、つまらない物はない。ＢＹ山田太郎。

俺は黒いボールを選び、陽菜はオレンジのボールを選んだ。レーンの前にある椅子に二人で座った途端、男が陽菜をガン見する。

ボーリング乙

男が陽菜に気を取られているのを見て、女が眉をひそめながら言う。

「ちょっと、ショーヘー！ どうしたの？」

「ん？ ああ、わりーわりー。なんでもない」

本当になんでもないのか、怪しいもんだ。口元がすごく緩んでるし。

次に、女がピンクのボールを持ってレーンの前に進み出た。少しだけ手を後ろに振ってから、ゴトンと音を立ててボールを置く。

それはへろへろと進んでいき、2本のピンを倒してから穴に落ちた。彼女が首を傾げながら言う。

「あれー、うまくいかないよ」

レーンの上に設置されたテレビの画面に「2本」の文字が表示された。ついでに、アニメのペンギンの群れが翼を振り上げて喜んでいる。

いや、ヘタクソすぎだね。俺でももう少し倒せるよ、たぶん。

よし、一丁派手にぶちかましてやるか！

黒いボールを抱え上げ、颯爽とレーンの前へ歩いていく。陽菜に勇姿を見せてやるぜ。

ここで見事にストライクを取れば「山田君、素敵！ 私の彼氏になつて！」となるかもしれない。いや、なるに違いない。なるに決まった！

「うおりゃあー！」

思いきり後ろへ振りかぶり、勢いよくボールをぶん投げる。

「行けー！」

ところが、それはあつという間にレーンの脇にある溝にはまった。そのままゴロゴロと転がっていき、ピンを一本も倒さずに穴へ落ちてしまう。

「なん……だと？　こんなバカなあああ！」

ピンの上にある画面に、「ガーター」の文字が表示された。さらに垂れ目のゴリラが映し出され、大喜びで跳ね回る。

ぐおおお、ちくしやう。動物の分際で人間をバカにしやがってー！
「ウガー！」

地団駄を踏んで悔しがる俺を見て、横のバカップルが爆笑している。俺は盛大にガンを飛ばしながら席へ戻った。

あいつら、いつかボーリングの球を顔面にプレゼントしてやる！
隣の女が、またボールを投げた。それはのろのろと進んでいき、ピンを倒して穴へ落っこちる。

直後、上にある画面に「4本」の文字が表示された。続けて、真っ白な体をしたアザラシの子どもが4匹並んであどけない顔を向ける。

俺の時とはえらい違いだなあ、おい！

茶髪にキャミソールワンピースの女が、にこにこしながら戻ってきて言う。

「やったー！」

たった6本で喜んでんじゃねーよ、まったく。俺が手本を見せてやるぜ！

再び黒いボールを抱え上げ、レーンへ向かってズカズカと歩いていく。

さつき、ボールは左側の溝に落っこちた。って事は、若干右向きに投げればOKだね。いやあ、俺って天才！

不公平ダー！

さあ、10本まとめてブツ飛ばしてやるぜ！

「よいしょー！」

黒いボールが勢いよく飛び出した。それはピンをまとめて薙ぎ倒
……さずに、右側の溝にはまって穴へ落ちていく。

「NOー！」

ちくしゃう、なんだって俺の言う事を聞かないんだ。この無機物
が！

後ろでは、また茶髪のカップルがバカ笑いしてる。その大きく開
けた口の中に、俺の靴下でも放り込んでやろうか？

顔をしかめてる俺を尻目に、茶髪の男がにやにやしながらレーン
に近づいてくる。お前なんか滑って転んで、ボールと一緒に穴の中
へ消えちまえ！

奴は大きく振りかぶり、ものすごい勢いでボールを放り投げた。
それは回転しながらかつ飛んでいき、横の溝にはまってから穴へと
消えた。

結果はガーター。当然、俺は爆笑だ。

「ひゃっははははは、ぶぎやぶぎやー！」

いや、最高すぎる。やってくれるぜ！

茶髪の男が頭をかきながら戻ってくる。

次は陽菜の番だ。彼女はオレンジ色のボールを抱え、とことこと
レーンの前に歩いていく。

「えいつ」

ゴトンと音を立ててボールが落ち、のろろと進んでいく。こり
やダメだ、たぶんガーターだな。

そう思ってたのにピンとピンがぶつかり合い、結局きれいさつぱ
り倒れてしまった。上の画面に「ストライク」の文字がでかかと
表示される。

はあ？

全力で投げた俺がガーターで、適当に投げたあの子がストライク。わけわかんねー！

彼女は満面に笑みを浮かべ、無邪気に跳ね回っている。

「やった、やったー！」

何やら音がしたので横を見ると、茶髪の男がへらへらしながら手を叩いていた。その隣で、茶髪の女がむすつとしている。

えーい、お前らには関係ないだろーが！

やがて、陽菜がにこにこしながら戻ってきた。俺は、苦笑いをしながらハイタッチをする。

「すごいね、上手いじゃん」

「えー、まぐれだよー」

だよ。そうとしか思えないよ。

ところが、その後も彼女は次々とストライクを叩き出した。俺も負けじとガーターを叩き出す。レーン上にある画面で、垂れ目のゴリラが大はしゃぎだ。

ふんがー、なめてんのか。誰か、俺のボールを遠隔操作してるだろ！

4ゲームを投げ終えた結果、陽菜は平均が220点を超えていた。俺は50点台だ。

小説サイトだけじゃなくて、ボーリングでも差がつくのか。ギャー！

外に出た時、彼女はすっきりした顔をしていた。俺はもやもやしたままだ。

まあ、陽菜が楽しんできたならそれでいい。そう思っていると、彼女が俺を見つめて言った。

春ガキター！

「あの、山田君……」

「何？」

陽菜は両手を後ろに回し、顔を赤く染めている。なんだなんだ？

「あ、あのね……」

「うん」

「や、や……」

「ん？」

「山田君を、お気に入り登録していい？」

え、なんだそれ。

「小説サイトで、俺をお気に入りユーザ登録するっていう事？」

「じゃなくて、現実の世界でお気に入り登録したいの」

現実の世界でお気に入り？

「まさか……付き合ってほしいって事？」

彼女は視線をそらし、もじもじしながらうなずく。

お、俺の人生に春が来たー！

「やったあああああ！」

「え、いいの？」

「もちろんだよ！」

「嬉しい。ありがとう」

いや、嬉しいのはこっちの方だ。よっしゃあああ！

家に帰ってきた後、彼女に聞きたい事があったのに気づいた。

しまった、完全に忘れてたよ。なんで「妖怪・お気に入りはずし」なんて妙な名前を使ってるのか知ってたのに。

よし、メールで聞いてみよう。

質問を送信してしばらくすると、返信が来た。内容はこういった物だ。

「私、結構気まぐれなんだよ。だから、お気に入り小説をしょっちゅう入れ替えるの。でも、それでトラブルになった事があって……」
え、なんだそれ。どんな小説をお気に入り登録しようが、自分の勝手だろ。

「恋愛小説で気に入ったのがあったから、感想を書いてお気に入り登録したんだよ。でも、だんだん話がつまらなくなってきたから解除したわけ」

へえ。まあ、よくある話だね。

「ところがその後、作者が泣きついてきてね。お気に入りはずさないでほしいって」

え、なんだそれ。

「その子が言うにはね。ランキングが上位の人にお気に入り登録されてると、アクセスが跳ね上がるんだって。『私もあなたの小説を登録しておきますから、どうかはずさないでください』って」

ずいぶん自分勝手な話だな。

「結局はずしちゃったんだけど、後ですごく恨まれてね。そんな事があったから、こんな名前にしたの。『私は気まぐれだから、よくお気に入りはずしますよ』って事をアピールする為にね」

ふーん。でもトラブリたくないなら、お気に入り是非公開設定にしておけばいいんじゃないかな？

その疑問をぶつけてみると、こういう答えが返ってきた。

「おもしろいと思った作品は、堂々と応援したいから。私がお気に入り登録する事によってアクセスが増えるなら嬉しいし。非公開設定にするとその効果がないんだよ」

ああ。陽菜の読者が、そのお気に入り小説をたどる事によってアクセスが増えるわけか。

冬ガキター！

なるほど。「ランキングが上位の作者にお気に入り登録された作品は、多くのポイントを集める」って話を聞いた事がある。

まあ、実際の所はわからない。元々読者を引き付ける力があつた作品を、上位の人が偶然お気に入り登録しただけかもしれないしね。でも、俺の作品のアクセスが急に増えたのはそのせいだろう。現に、お気に入りをはずされてからはアクセスが激減してるしね。

うつつ、切ない。来るのは非難のコメントばかりで、ポイントは相変わらず0だ。

でも俺は負けない。完結まで書ききらなきゃ、その作品は完成した事にならないからな！

超かわいい彼女もできたし、気合いを入れてがんばろう。

うおおおおー！

陽菜と付き合い始めてから一週間が過ぎたある日、とんでもない事が起こった。

彼女にメールしてみても、届かずに返ってきてしまう。電話をかけてみても「おかけになった番号は使われておりません」というアナウンスが流れるだけだ。

こ、これはまさか……お気に入りはずされた？

うおおおおおおー！

陽菜の「私、気まぐれなんだ」という言葉が頭をよぎる。ちくしやう、そう来たか。あいつが妖怪・お気に入りはずだという事を忘れていたー！

「ギャアア、アアアアアー！」

俺はタンスからトランクを取り出して頭にかぶり、自分の家を飛び出した。さらに、奇声を上げながら住宅街を走り抜ける。

「キエエエ、エエエエエー！」

前から歩いてきた女子中学生二人が、目を見開いて硬直する。誰か俺を通報してくれ。誰か俺を逮捕してくれええええ！

「ンキヤアアアア、ヒキエエエエエエー！」

そのまま川原へ走っていき、こ汚いドブ川へ飛び込んだ。全身が泥に浸かり、死ぬほど気持ち悪い。

「ぐええつ、ぺっぺっ！」

ああ、上から下まで真っ黒だ。もうなんでもいいや。みんな、俺をキチガイと呼んでくれ。

のろのろと陸に上がると、坂の上にある道路で小学生の集団がこっちを見ていた。丸い目をさらに丸くして、ランドセルをしまった体をこわ張らせている。

俺は彼らににじり寄り、両手を振り上げて叫んだ。

「グハハハハハハハ、ヘドロ怪人だぞー！」

小学生たちは悲鳴を上げ、泣き叫びながら逃げていく。

あーあ、何やってんだ。もう色々と末期だよ。

のろのろと家に帰って風呂で服と体を洗い、自分の部屋のパソコンの前に座った。

うつ……ミジメすぎる。こんな俺の話を聞いてくれるのは彼しかない。

俺がアクセスしたのは、ある掲示板だった。

底王様ー！

それは「小説家の野郎」の利用者が集う掲示板だった。

何十という数のスレッドが並んでいるが、俺が利用しているのは一つだけだ。

タイトルは「底辺たちの楽園」。小説の野郎にいくら投稿しても評価ももらえなければアクセスも少ないという作者たちの憩いの場だ。

基本的にそのスレの利用者は名無しで、名前欄にハンドルネームを書き込む事はない。

だからどれが誰かなのかはさっぱりわからないはずなのだが、あっさり特定されてしまう人がある。「底王」と呼ばれているお方だ。帝王じゃなくて底王。なんて悲しい響きだろう。別に、本人がそう名乗っているわけじゃない。他のユーザから勝手にそう呼ばれているのである。

彼は「小説家の野郎」で一つの伝説を作った。

累計600万字以上を投稿して、お気に入り0、感想0、レビュー0という記録を叩き出したのだ。

毎日欠かさず投稿していてそれなのだから、本当に信じられない。彼は初めて掲示板に現れた時、こんな書き込みをした。

「毎日五千字以上投稿してるのに、一日のアクセスが2ケタいった事がない」

「累計600万字以上投稿してるのに、一度もお気に入り登録された事がない」

当然、他のユーザからは「ネタだろ？」とか「見え見えの嘘つくなよ、ツマンネ」といったレスがついた。しかし彼がマイページのURLを貼った途端、全員がそれを信じざるを得なくなったのだ。すげえ。ガチで半端ねえ。

完結済みの長編がずらずらと並んでいるにも関わらず、お気に入り

り投稿が1件もないのだ。

累計アクセスを見てみると、長編で2000から1000。短編に
関しては3から10しかない。

その事実が明るみになって以来、彼はスレッドの利用者たちから
「底王様」と呼ばれて敬われる様になった。いや、腫れ物扱いされ
ているという気もするけど。

底辺の楽園スレッドには、今日も彼の元氣一杯な書き込みがあっ
た。

「昨日、一万字ずつ三回に分けて二時間おきに投稿したんだ。そし
たら一日の累計アクセスが9に増えたよ。複数回の投稿、マジでオ
ススメ！」

普通なら失笑物だけど、誰も笑う者はいない。

「底王様、さすがです！」

「やはり工夫が大事ですね。感服致しました」

「皆の者、底王様に続くのじゃ！」

やっぱり、最底辺の人にはみんな優しいんだなあ。愛を感じるよ。
って、それどころじゃない。彼なら、きっと俺の苦しみを理解し
てくれるだろう。さあ報告だ。

「底王様。お気に入りをはずされた上に振られました」

王様のお言葉

何度も辛酸を舐めた底王様なら、俺の辛さをわかってくれる事だろう。

しばらくすると、彼がレスしてくれた。

「それがどうした？」

って、同情のカケラもねーよ！

俺は、あわてて書き込んだ。

「たった一件のお気に入りをはずされて、しかも彼女に振られたんです。もう小説を書くのやめようかと……」

すると、こんなレスがあった。

「お気に入りが減ったくらいで書く気力をなくすのは、本当に伝えたいメッセージを持っていない証拠だぞ」

キ、キビシー！

「お前が読者に何かを伝えたいと思うのなら、最後まで書ききれ。それから、結果に泣くな」

ごもつともです。

「心の中に、どんな宝石よりも美しい物があつたなら……それを自分の作品に乗せて、読者の心に届ける事ができたなら……受け止めてくれる人間は必ず現れる。俺はそう信じているよ」

この人が、お気に入り0でも心が折れない理由がわかった気がする。

俺はお礼の言葉を書き込み、掲示板を閉じた。

そうだよ。お気に入りが減ったから、なんだって言うんだ。陽菜に振られたからなんだって言うんだ。

俺は、自分の熱いメッセージを伝えるために小説を書いている。

だから最後までがんばろう。

そう思いながら「小説家の野郎」のユーザページを開くと、新着メッセージがあった。陽菜からだ。

二通ある。まず一通目。

「ごめんなさい、携帯なくしました！」
はい？

「見つかるまで一旦解約します。見つからなければ新規契約します。だから、しばらく音信不通になると思います。本当にごめんなさい」
はあ、なるほどね。そういう事情があったのか。

もう一通は、こういう内容だった。

「携帯、見つかりました！」

ああ、そっか。それはよかったね。

「自分の布団の中に紛れ込んでました。私って本当、おつちよこちよいで困ります。ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした」
まあ、とりあえず安心した。

あれっ、携帯にメールが来てる。彼女からだ。

「メッセージ見てくれた？ ごめんね、てへっ！」

何やってんだか、本当に。俺は苦笑しながら返信した。

「見たよ。お前、ユーザ名を『妖怪・おつちよこちよい』に変えとけ」

しばらく執筆してから陽菜のマイページを見ると、ユーザ名が「妖怪・おつちよこちよい」になっていた。本当に変えたようだ。

妖怪・お気に入りはずしの被害にあっているという報告は後を絶たない。きつと、陽菜の他にも同じ事をしている奴がいるんだろう。次に彼らが行くのは、あなたの所かもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9831x/>

妖怪 お気に入りはずし

2011年11月15日03時15分発行